



[お問い合わせ]

九州大学 社会連携推進室(企画部社会共創課連携推進係内)

TEL:092-802-2301

mail:syarenkei@jimu.kyushu-u.ac.jp

https://syarenkei.kyushu-u.ac.jp

九州大学

科学コミュニケーション レポート 2020-2022

九州大学社会連携推進室科学コミュニケーション推進グループ 編

ご挨拶	01
I. 寄稿エッセイ	02-11
■ 江藤 信一 氏	02
■ 中武 貞文 氏	03
■ 坂倉 真衣 氏	04
■ 山岡 均 氏	05
■ 渡辺 政隆 氏	06
■ 藤吉 隆雄 氏	08
■ 谷村 優太 氏	10
■ 小林 良彦 氏	11
II. 2020～2022年度 活動報告	12-15
■ メンバー	12
■ 活動実績	13
■ サイエンスカフェ@ふくおか	14
III. シンポジウム	16-24
■ 科学コミュニケーション推進グループ設置記念 公開シンポジウム	16
■ 基調講演	
元村 有希子 氏	18
小林 俊哉 氏	18
■ 事例紹介	
北海道大学 CoSTEP	19
サイエンスカフェ@ふくおか	19
いきものサロン	20
ゲイコウアート&サイエンスカフェ	20
筑紫地区地域連携推進チーム	21
九大生の教える科学教室 from iTOP	21
Quricon	21
■ VISION EXPOシンポジウム	22

ご挨拶

九州大学の社会貢献・社会連携の取り組みには長い歴史がありますが、2021年に策定した、2030年を目途とする大学の方向性を示す「Kyushu University VISION 2030」の中に、重要な柱の一つとして「社会共創」が掲げられてからは、さらに取り組みを充実・加速しています。

その一環となるのが、若手教員が中心となって大学の部局横断で様々な取り組みを行う「社会連携推進室科学コミュニケーション推進グループ(愛称:Q-STRING)」の事業です。「Q-STRING」は、英語表記の「Q-dai Science Communication Promoting Group」のアルファベットを組み合わせたものですが、「string=糸」を意識したもので、地域に伸びる横糸と、時代を越えて続く縦糸が織りなす科学コミュニケーションが、より広く拡大し、より長く持続していくことを願った愛称です。

国の第6次科学技術基本計画においても、市民参画など多様な主体の参画による知の共創と科学技術コミュニケーションの強化が重要な課題とされており、本学でも社会連携推進室を中心に、地域社会と協働した研究教育活動を通して、社会の持続可能な発展と人々のウェルビーイングの向上にさらに貢献していきたいと考えます。

本報告書が、学内外の多くの皆様と、科学コミュニケーションの意義と重要性を共有する一助となれば幸いです。

九州大学理事
社会連携推進室長 神崎 智子



九州大学の社会連携推進室内に設立された科学コミュニケーション推進グループ(Q-STRING)が2020年に発足してから、既に4年が経過しようとしています。本報告書では、設立から3年間にわたる活動の概要をまとめています。設立当初は新型コロナウイルス感染症の影響により、対面での活動が大幅に制限されたものの、全学を対象としたアンケート調査の実施や、2回のシンポジウムの開催など、大規模な取り組みを進めてきました。これらの成果を報告書としてまとめ上げることができたことを大変嬉しく思います。

九州大学では、「Kyushu University VISION 2030」の柱の一つとして「社会共創」を2021年に掲げました。また、同年からは科学技術基本計画の下、多層的な科学コミュニケーションを推進する第6期がスタートしました。これらの文脈の中で、時宜を得た活動を展開することができたと自負しています。実施した全学アンケートに関しては、投稿論文としてまとめており、シンポジウムに関しては本報告書に詳述していますので、ぜひご一読ください。

さらに、これらの取り組みを通じて浮き彫りになった多くの課題に対し、いただいた貴重なご意見を反映させ、今後の活動に活かしていく所存です。

2024年3月には、サイエンスカフェ@ふくおかが記念すべき100回目を迎え、石橋総長を講師としてお迎えする予定です。また、大学の近隣地域との交流を深めるため、「いとLab+」での活動も計画しています。今後も、社会に開かれた大学を目指し、さまざまな活動を展開していく予定です。

九州大学社会連携推進室
科学コミュニケーション推進グループ長 吉岡 瑞樹

九州大学社会連携推進室 科学コミュニケーション推進グループ(Q-STRING)とは？



本学では2008年度より「九州大学の教育研究における社会連携事業に関する基本方針」を掲げ、社会連携活動の取り組みを既に10年以上に亘って展開してきました。昨今の社会情勢を鑑み、こうした取り組みの一層の充実のために、2020年4月に社会連携推進室に「科学コミュニケーション推進グループ」、通称 Q-STRING(Q-dai Science communication Promotion Group)が設置されました。文理問わず、様々な部局の教職員から構成されており、本学における科学コミュニケーションの実践と場づくりを支援しています。



エッセイの寄稿に際して

Q-STRINGの立ち上げに際し、科学コミュニケーション活動の第一線で活躍されている皆様に、ご自身の活動を振り返りながら、九州大学及びQ-STRINGへ期待する想いなどについてご寄稿いただきました。

私がサイエンスコミュニケーションに関わるきっかけとなったのは、「ばりカフェ」でした。九州大学が戦略的拠点育成事業に採択されたことを受けて、2004年に九州大学ユーザーサイエンス機構(以下、USI)が設置され、そのUSIの若手研究者を中心に、学問的背景(メンバーには工学系、心理学系、教育学系、芸術工学系などの様々な専門を持つ研究者が関わっていました)、経歴などに係わらず、横断的な活動を念頭に組織されたのが、「ばりカフェ」でした。ちなみに「ばり」は、ラテン語の“Varietas(多様性)”という言葉から引用しました(もちろん、博多弁の「ばり」も含まれています)。

「ばりカフェ」は2006年9月に第1回目を開催し、2009年1月までに20回開催され、食やくら、環境など様々なテーマで、様々な会場(九大施設内だけでなく、中学校や高校、日本科学未来館、水族館など)で展開することができ、500名以上の参加者を迎えることができました。「ばりカフェ」に関わる前の私は単なる工学系のイチ研究者でしたが、「ばりカフェ」にてスピーカーとして関わり、さらには運営等にも携わる中でサイエンスコミュニケーションに関わっていくことで、一般の方々に向けたアウトリーチの難しさを感じ、だからこそサイエンスコミュニケーションの重要性に気づき、以降の私の教育・アウトリーチ活動の中にその気づきは活

かされているように感じています。「ばりカフェ」終了後、福岡市博多区にある老舗カフェ「カフェ・ブラジレイロ」を拠点とした「カフェ・なんしよーと」の運営に2012年から携わり、サイエンスだけでなく、文化や風土、歴史などの知を一般市民に向けて発信する場を設けており、現在も「カフェ・なんしよーと」は継続しています。

「九大発サイエンスコミュニケーションの継続と発展を！」

Q-STRING(九州大学科学コミュニケーション推進グループ)は、「ばりカフェ」でおこなってきた九州大学のサイエンスコミュニケーションを発展させ、継続し、進化させてくれていると(勝手に)感じています。これからの未来は、より難しい時代となっていく中で、サイエンスコミュニケーションの役割は非常に大きいと思っています。これからも九州大学がサイエンスコミュニケーションを推し進めることで、社会に開かれた総合知のある拠点として、存続し発展していくことを切に願っております。



Profile
江藤 信一
久留米工業大学工学部
情報ネットワーク工学科
教授

いとしまサイエンスキャラバンの夜明け前

私は2000年に新エネルギー・産業技術総合開発機構産学連携人材育成事業(通称:NEDOフェロー事業)の参加を機に、九州大学で産学連携活動を開始した。後に「サイエンスコミュニケーション」にも近いと知ることになる実践活動は、当時の産学連携センター/知的財産本部(IMAQ)(学術研究・産学官連携本部の前身)で行われた。当時は、研究成果の発信業務、いわゆるセミナー・イベントの比率が高かった。不特定多数の企業にPRを行い、反応のあった企業との共同研究や技術移転をコーディネートしようとしていた。乱暴に言えば「確率」に身を委ねる方法であった。来客も反応もないイベントもあり落胆することもあった。この頃、「企業向けの研究成果の情報発信」と「サイエンスカフェ」との類似性に漠然と気づいた私は、「双方向の密な交流が研究成果の理解を促し、共同研究などへの行動変容につながる」という仮説を有するようになった。

いとしまサイエンスキャラバンのはじまり

同時期に伊都キャンパスへの移転が本格化し、一部部局が伊都キャンパスで活動を本格化するにあたり、糸島市(当時の前原市、二丈町、志摩町)と福岡県が、地域と九州大学との関係性強化を熱望していると知り、先の仮説を実現すべく、交流事業の一環として「いとしまサイエンスキャラバン」を提案することになった。サイエンスコミュニケーション、アウトリーチ、産学連携や地域交流の「いいとこ取り」をする雑ではあるが貪欲(どんよく)な企画であったと今では思う。関係者となつたり、創り、そして科学技術振興機構(JST)の競争的資金も獲得し、「いとしまサイエンスキャラバン」が2007年にはじまった。サイエンスコミュニケーションとの出会いであり、産学連携の対象を「企業・組織」から「個人」に拡張する挑戦でもあった。詳しくは後述の参考資料を参照頂きたいが、ここでは当時のエピソードを紹介したい。

「新しい大学の建物が山の上に見える。あの建物の中で何が行われているのかわからなかった。今日のサイエンスキャラバンに参加してはじめて、大学の教職員や学生が、知を創り出そうと、夜中まであの中で頑張っていると知った。」という言葉サイエンスキャラバン参加者からかけられたとき、参加者が九州大学の教員に質問し、面談

を申し込む光景を見たとき、企画の意図が地域の皆様に伝わった充実感と安堵感を得たことを今でも思い出す。

小規模双方向交流事業の拡大、浸透

鹿児島大学への異動後は、新しい「いとしまサイエンスキャラバン」をやりたいとずうずうしていたが、新たな環境での基盤づくりに忙殺され着手できないでいた。そうこうしているうちに、熊本や宮崎で「マッチングラウンドテーブル」が開始され、小規模で双方向性の高いコミュニケーション事業が広範に浸透、さらには定着するようになった。鹿児島大学の研究者有志によるサイエンスカフェもはじまり、研究成果の社会普及が徐々に拡大するのを見守っていた。そのような折、偶然にも、地域企業と大学研究者との交流事業を構想する鹿児島市役所の若手職員のMさんとの出会いがあった。一緒に熊本へ視察するなどして、新しいサイエンスコミュニケーション事業「かごしまTechミーティング」の開始にこぎ着けた。今年で7年目を迎える。個人の頭に浮かんだ企画が、地域の交流の場・制度として定着しつつある今、研究成果の新たな社会展開「いとしまサイエンスキャラバン」や「かごしまTechミーティング」を超える事業に思いを馳せている。これからも新しい研究成果の発信・交流方法を探っていきたい。そして大学・地域の垣根を越え、連携の輪を広げたいと考えている。ご興味ご関心ある方々は中武(nakatake@km.kagoshima-u.ac.jp)までアクセスをお願いしたい。

「いとしまサイエンスキャラバンがはじまった頃」



Profile
中武 貞文
鹿児島大学南九州・南西諸島域
イノベーションセンター
准教授

参考資料:

1. 「産学連携・地域連携を指向したアウトリーチ活動「いとしまサイエンスキャラバン」のモデル構築」(JST 地域科学技術理解増進活動「調査研究・モデル開発」終了報告書)
<https://www.jst.go.jp/sis/archive/past/res19/h19/04.pdf>
2. 事業化マッチングのためのラウンドテーブル(熊本市)
https://www.city.kumamoto.jp/hp/kiji/pub/detail.aspx?c_id=5&id=19015&e_id=1
3. マッチングのためのラウンドテーブル(宮崎大学)
<https://www.miyazaki-u.ac.jp/kscrs/sangaku/event/round-table.html>
4. かごしまTechミーティング(鹿児島市/鹿児島大学南九州・南西諸島域イノベーションセンター)
<https://www.city.kagoshima.lg.jp/san-sousyutu/techmeeting.html>

私が九州大学で「科学コミュニケーション活動」をしていたのは、早いもので今から10年以上前のことである。2009年に九州大学農学部を卒業後、統合新領域学府ユーザー感性学専攻(当時)に1期生として入学した。その博士課程を2015年に満期退学するまでの丸7年間、私の大学院生生活は、「科学コミュニケーション活動」とともにあった。

このように書くと、私が当初から「科学コミュニケーション」についての研究や実践をしようと大学院に入学したかのように思えるかもしれないが、大学院入学時の私は、「科学コミュニケーション」という言葉すら知らなかった。農学部生であった私の周りでもそのような言葉を使っている人はいなかったし、学生時代の私の眼差しで広く当時の九大全体の雰囲気を取り戻した時にも「科学コミュニケーション」という概念は、そこまで一般的に受け入れられているものではなかったと言ってよいのではないと思う。2005年が「サイエンスコミュニケーション元年」(小林2008)と呼ばれる年であるという指摘を鑑みても、私が大学院に入学した当初は、その概念や実践が、まだ十分には浸透していなかったのだらうと推測する。

当時の九州大学には、「科学コミュニケーション」を体系的に学べる学府や施設等があった訳ではないが、今振り返ってみると、ユーザー感性学専攻や当時の九州大学箱崎キャンパスが置かれた環境は、「科学コミュニケーション」の萌芽を心身で感じ取る上では理想に近いものであったように感じる。ユーザー感性学専攻では、多様なユーザーを想定した感性を基盤にしたコミュニケーションや場づくりなどについて幅広く学ぶことができ、「科学を伝える/共有する活動」をするにあたって、情報の受け取り手の立場からはどう捉えられるのか(捉えられたのか)、常に「ユーザー(受け手)」の立場に立ち返って考えるマインドが身に付いたことも大きかった。

大学院生の私が最も大切にしていたのは、九州大学箱崎キャンパスが置かれ、自分自身も生活していた福岡市東区箱崎で実施していた2つの活動(「五感で楽しむおしゃべりサイエンス教室」「コドモtoサイエンスカフェ」)であった。「ユーザー(受け手)」の立場に立ち返って考えるというマインドを持った際に、「自分自身が生活している地域」に目が向くようになったのは、自然な流れであったように思う。それらの活動の詳細については、坂倉

(2012)、坂倉(2014)などをご参照いただければと思うが、そこに暮らす子どもたちや、箱崎公民館主事(当時)の糸長紀子さん、箱崎水族館喫茶室オーナーの花田宏毅さん・典子さんを始め地域の人たちと共に「作り上げていった」ように感じられる科学コミュニケーション活動は、私が現在も広く「科学を伝える/共有する活動」に携わり続ける大切な基盤になっている。

「科学コミュニケーション推進グループ(Q-STRING)」が立ち上がったことは、九州大学の教員・学生たちにとってはもちろんのこと、九州全体の大学においても大きな意義があることであると思う。「Q-STRING」には、九州の学生・社会人たちが「科学コミュニケーション」について体系的に学べる機会の提供と、学生主体の自由闊達な活動をハード・ソフトの両面から支援する体制を大いに期待したい。「若者・馬鹿者・よそ者」とはよく言ったように、大学院生であった私は「やりたい」に溢れていた。大学生・大学院生という立場で、地域の人々の生活に入り込み、そこで起こっていることを豊かな感受性でキャッチしていけるのも若者ならではの、なのかもしれない。「科学コミュニケーション」という考え方が根付いていくことは、自然科学や人文・社会科学など幅広い学問への関心を改めて持つ機会になるとともに、「自分自身が生活している地域」に目を向けるきっかけにもなるのではと思う。当時大学院生であった私が、現在に至るまで、自分が生活している地域で「科学を伝える/共有する」活動に携わり続ける土壌を育ててもらえたように――。

体系的に学べる機会の提供と、学生の自由闊達な活動支援への期待
「科学」と「生活」とをつなぐ
科学コミュニケーション



Profile
坂倉 真衣
宮崎国際大学教育学部 准教授

引用文献：
・小林傳司。(2008)。サイエンス・コミュニケーション。科学技術社会論研究, 5, 7-9.
・坂倉真衣。(2012)。子どもたちの日常の中にあるサイエンスコミュニケーションの場を醸成する-福岡の校区公民館での実践をもとに。『日本サイエンスコミュニケーション協会誌』日本サイエンスコミュニケーション協会, 1, 66-67.
・坂倉真衣。(2014)。子どもたちの生活の中にある「科学」のかたちについて考える-自らの実践を通して。『日本サイエンスコミュニケーション協会誌』日本サイエンスコミュニケーション協会, 3, 50-51.
・坂倉真衣。(2014)。親子で楽しむ体験型サイエンスカフェコドモ to サイエンスカフェの紹介。日本サイエンスコミュニケーション協会誌, 3, 42-43.

Q-STRINGが2020年4月に発足し、活躍を続けていると伺った。九州大学で科学コミュニケーションが重要視されるようになったことをたいへん喜ばしく感じている。

1992年に私が九州大学に着任したころ、科学と市民の接点は限られたものであった。講演会などの「私喋る人、あなた聞く人」式のワンウェイ・コミュニケーションが主流で、講師としても物足りなく感じていた。天文学は昔から市民参加が盛んな分野で、私も移動式望遠鏡で全国各地を巡回して開催する天体観望会を手伝ったり、1994年の彗星木星衝突を手作り望遠鏡で市民とともに観察したりしてきた。

その経験から、科学コミュニケーションにおいては、市民が能動的になることがたいへん効果的であると実感していた。ではその仕組みをどう構築したらいいだろうか。

2006年から2007年にかけて、文部科学省が毎年4月第3週に実施する「科学技術週間」に合わせた科学ポスター第3弾「一家に1枚 宇宙図」の制作に携わった。2007年4月、このポスターのお披露目イベントが企画され、各地でサイエンスカフェが提案されたが、私はカフェという柄でもない。また、福岡には見知らぬ同士がたまたま同席となって、野球だの天気だのについて語らう「屋台文化」がある。そこで私たちは「サイエンスパブ in 福岡」と銘打って、酒杯を交わしながら星や宇宙についての会話を楽しむ会を企画することとした。小道具としては宇宙図を防水加工してテーブルマットとし、大学院生を含めたコミュニケーターが参加者それぞれの関心に合わせた話題で会話する。時には出張してきた研究者にもゲストとして加わってもらい。そのうち参加者が、自分で撮影した天体写真を持ってくるようになり、話題はさらに広がる。好循環

が回って、このサイエンスパブは10年間で30回を超える開催となった。現在Q-STRINGグループ長を務める吉岡瑞樹さんが先導する「サイエンスカフェ@ふくおか」は、2012年から開催され、私も複数回参加させていただいた。科学を話題とした会話が福岡に根付いていることを嬉しく思う。

サイエンスパブの副産物に、「小惑星 王貞治」がある。サイエンスパブで天体に名前を付ける



2015年7月、王貞治さん(右)に命名提案を説明する筆者(写真:筆者提供)

ことについて語り合っているとき、「福岡の著名人の名前を天体に命名出来たらきっといい話題になる」という流れになり、「それなら福岡ソフトバンクホークスの王会長を置いて他になかろう、紹介してみたい」という参加者の声も上がって話はトントン拍子に進んだ。2015年夏にはドーム球場の会長室を訪ねて本人の快諾を得(写真)、国際天文学連合に命名提案して数か月、2016年2月にめでたく「小惑星 王貞治」の誕生となった。

直後に私は国立天文台に転出したが、良い置き土産になったと感じている。

九州大学に在籍していた頃の活動は今も息づいている。高年次教養科目の実施のために伊都キャンパスに導入したペガサス望遠鏡は、授業や研究に使われるのに加え、プチ天体観望会が月2回のペースで開催されて活躍を続けている。令和6年の予定も公開され、これからも九州大学発の科学コミュニケーションの一翼を担うと期待される。ぜひ皆さんも観望会にご参加いただきたい。



Profile
山岡 均
国立天文台 天文情報センター長

参考：
サイエンスパブ <http://www.sciencepf.sakura.ne.jp/sci-pub/main.html>
宇宙図は文部科学省の「一家に1枚」シリーズのサイト <https://www.mext.go.jp/stw/series.html>よりダウンロードしてください。
ペガサス望遠鏡プチ天体観望会 <https://ssdlab.info/3c61c65189be4541bee0e3c965d4af8c>

九州大学に「科学コミュニケーション推進グループ」が設置され発展中とのこと、まずはエールを送らせていただきたい。

文部科学省科学技術振興調整費振興分野人材養成プログラムとして北海道大学、早稲田大学、東京大学の3大学で科学コミュニケーター養成のモデル事業が開始されたのは2005年度のことだった。それを機に他の大学でも同様の事業が続くことが期待されたが、ことはそうまくいかなかった。

たしかに科学コミュニケーションを謳う単発の授業科目を設置する大学は増えた。しかし、当初の目標だった、科学コミュニケーションに特化した大学院修士課程を設置している大学は事実上1つも存在しないと聞いていい。存在するのは副専攻のコース(東京大学)、社会人も履修できる公開講座(北海道大学)、科学コミュニケーション研究をテーマにできる大学院、学部生向けの副専攻プログラム(同志社大学)といったところである。

その一方で、大学や研究機関の研究広報で科学コミュニケーターが活躍しているケースが増えている。ただしその多くが有期雇用という不安定な身分であるという事実は、専門職(スペシャリスト)としての科学コミュニケーターという職種が十分に認知されていないことの証しといえるかもしれない。そのような状況の中で、専門職としての科学コミュニケーターの養成を掲げた大学院の創設が実現しにくいことは理解できる。

もっとも、2003年に発表した『科学技術理解増進と科学コミュニケーションの活性化について』(渡辺 & 今井、2003、NISTEP調査資料100)における主要な提言の1つは、科学コミュニケーションのスキルとマインドを身につけた多様な人材の育成だった。

その点で、九州大学の推進グループの主たる活動であるサイエンスカフェの実施は理にかなっている。大学として実施するサイエンスカフェは、研究者をカフェの場に引っ張り出すことで科学コミュニケーションを体験してもらう機会をもうけることだからだ。

自分のためのアウトリーチ

ぼくは、JST主催で2006年から毎年11月に開催されているサイエンスアゴラの実質的なプログラムディレクターを、2008年から11年までの4年間務めていた。

2010年のサイエンスアゴラでは、本部企画の1つとして「本当の科学のハナシ、誰から聞けばいいの?」を実施した。科学者のアウトリーチのあり方について一石投じることが目的だった。アウト

リーチをいやいやの義務と感じている研究者の意識をなんとか変えたかったのだ。セッションは基調講演とパネル討論という構成。基調講演は、アメリカでの研究者生活が長い、カリフォルニア大学パークレー校から東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構に着任(当時は機構長)して3年目を迎えていた素粒子物理学者の村山齊さんをお願いした。そしてこの人選はみごとにハマった。

村山さんはアメリカにおいて研究者に課せられた社会貢献を振り返り、まずは、アウトリーチは科学者の義務であるがその種類はいろいろであるということから説き起こした。そして、義務ではあるが負担とは思わない。なぜなら、たとえば自分の研究について話せる機会をもらえるなんて、こんなに楽しいことはないではないか。さあ何を話そうかと考える中で、自分の研究を俯瞰し整理できる絶好の機会だからと語ってくれた。

たとえばサイエンスカフェを企画するにあたって、ゲストスピーカーとなる研究者に、このようなモチベーションをもたせることが大切だろう。サイエンスカフェの参加者は、そこそこ多様である。そういう聴衆に向かって話すには、心の準備も必要だ。

ぼく自身の経験からいうと、質問を受けて、「ああなんだ、そこから話さなければいけなかったのか」と思ったことが1回ではない。往々にして、そのテーマは自分も詳しいと思っている聴衆ほど、誤解や勘違いから出発していたりする。自分にとっては当たり前のことでも、相手にとってはそうではないと気づくことは、サイエンスカフェでの貴重な発見となる。こういう体験から、常々学生には、科学コミュニケーションとは双方の科学リテラシーの照らし合わせであり更新であると語るようにしている。

科学コミュニケーションは科学リテラシーの照らし合わせ

ただし科学リテラシーには落とし穴がある。科学は多様であり細分化、専門化している。科学系の専門化といえども、絶対の科学リテラシーはありえない。自分の科学リテラシーを正義と思いこんでしまうと、その時点で、科学リテラシーの照らし合わ

「大学における科学コミュニケーション再考」

せは成り立たない。あるいは、教えてやろう、正してやろうという姿勢は、意識的か無意識にかを問わず、欠如モデルの最たるものとなる。

2023年3月に、作家の瀬名秀明さんと共に、『知の統合は可能か——パンデミックに突きつけられた問い』(時事通信社、2023)を上梓した。そこで多様な「専門化」との対話を重ねる中で見てきたのは、対話ができるのは人だけだが、実りある対話にするには心構えが必要だということだ。

人間性の進化に関する近年の研究成果から、人との動物を隔てている大きな要因は、人は他人の行動を模倣し学習する能力に長けている点であることが見えてきた。それに加えて、何かを教えるという行動(教示行動)が見られるのは人だけでもある。

教え合い、模倣し合うことで、生存繁殖に有利な行動が広まり、言語が獲得されてコミュニケーション能力が高まることで教示の精度が上がったのだ。そして有利な行動は累積し、文化として定着してきた。その教示の範囲は、当初は近親個体間だけだったが、やがて同じ共同体内、さらには社会全体に広がってきた。

われわれは、人だけに許されたこの潜在能力に、今一度改めて賭けてみるしかない。争いや誹謗中傷がまん延する世の中だが、希望を見つけるとしたらそこしかないだろう。

そして、科学コミュニケーションは、研究成果の発表や楽しい科学だけではなく、息苦しくない社会を取り戻すためのツールであるべきである。そのために、人文科学を含む多様な科学者を抱える総合大学が果たすべき役割は大きい。九州大学の今後の取り組みに期待する所以である。



Profile
渡辺 政隆
日本サイエンスコミュニケーション協会 会長
同志社大学 特別客員教授
東北大学 特任教授



今回、九州大学に科学コミュニケーション推進グループが設置されたことに伴い、同グループの活動設計に参考になる情報の提供を求められた。そこで、名古屋大学の全学運営支援組織でサイエンスコミュニケーションを担当する教員として勤務した経験から、サイエンスコミュニケーション活動での重要点だと筆者が考えるポイントを「連携」活動に絞って述べてみる。

ここでいうサイエンスコミュニケーション連携活動とは、2者以上の関係者が協働してサイエンスコミュニケーション活動を行うことを言う。当たり前の説明だが、その当たり前が九州大学ではうまく運営できなかった過去が10年ほど前にある。なぜ筆者が知っているかというと、筆者が名大で担当していた事業と九大でうまく運営できなかった事業は、同じJST予算による同種のものだったのである。そして、筆者自身が名大中心のコンソーシアムと九大中心のコンソーシアムの連携活動の名大側の窓口をやっていた。そのため、九大JST事業の動きを遠くから見ているのである。現在の名大・九大のどちらの内部にも、このJST事業間連携を知っている方はいないのではないだろうか。

この同種の活動というのが「科学コミュニケーション地域拠点」という取り組みであり、そのなかで「地域科学祭型拠点」という活動であった。筆者の知る限り、日本では6つの地域科学祭がある、または、かつてあった(表1)。この6つの地域科学祭のうち5つはJSTネットワーク形成事業という外部予算で運営支援されスタートしており、残る1つの福岡の地域科学祭は同事業で運営連携していくとされていた。その福岡事例で運営連携する主体とされていたのが九大だったわけである。

ここで、東京国際科学フェスティバルは東京都全域を対象地域としていたが、三鷹市域を対象とする三鷹の森科学文化祭と重ねての運営開催だったようである。東京国際科学フェスティバルは2016年度を最後に開催されなくなったが、三鷹の森科学文化祭は今でも開催されている。縮小継続していると言っても良いかもしれない。

また、全国で実施されている似た取り組みである「青少年のための科学の祭典」という活動との違いを説明すると、地域的な広がりを持ち、複数の機関が主体的に参画し、数日を超えて一定の期間に渡って開催され、対象が青少年に限定されないものが「地

域科学祭」である。

フクオカ・サイエンスマンスは福岡県が主催で継続開催され、九大JST事業「SAFネット」は独自企画を実施しつつ既存の地域科学祭と運営連携していくとしていた。JST事業によるスタートアップではない地域科学祭がいち早く開催されており、それを補完する事業として九大JST事業は設計されていた(と外側からは見えていた)。この設計は他の地域科学祭拠点とは大いに異なるところで、福岡県施策の先進性と九大JST事業の先駆性が当時とはとても際立って見えていた。また、JST事業での役割分担も理にかなったもので、提案機関が九大、運営機関が(財)九州先端科学技術研究所、連携自治体が福岡県と福岡市、参画機関が西南学院大、福岡大、福岡教育大というコンソーシアム形成として提案されたものであった。このJST事業は地域に科学技術コミュニケーションのネットワークを埋め込んで継続運用するためのスタートアップ資金を提供する事業であり、JST、提案機関(名大や九大)、自治体の3者で公印契約を締結していた。

となると、福岡県域には、SAFネットという名前を継続使用しているかどうかは別としても、すでに科学技術コミュニケーション「連携」活動は根付いているはずである。ところが、2012年度限りでJST事業の予算が切れると、このSAFネットとは連絡が取れなくなってしまう。また、しばらくするとウェブサイトも消滅してしまった。

予算が切れたり人材が交代したりしたら、以前に組織として対外的に約束していたことを自然にナシにするというやり方は、社会からの信用を毀損すると思う。これは社会の常識だと思いが、大学界隈を見ていると(九大に限らず)なぜかそう見えてしまう事例が目につく。SAFネットがそういう事例になってしまったのは残念なことだと思って筆者は遠くから見ていた。

本稿冒頭で、2者以上の関係者が協働して行うサイエンスコミュニケーション活動に絞って論じると書いた。ここまで書いた事例で問題なのは、他方の関係者とのコミュニケーションを一方的に反故にしてしまう点である。科学技術コミュニケーションサイ

「科学技術コミュニケーション」
『連携』活動は広報ではないし
アウトリーチでもないし
先駆例だったはずの九大JST事業との連携の記憶から

(表1) 日本の地域科学祭

地域科学祭名	開催年代	JST支援年	主導機関
はこだて国際科学祭	2009～開催中	2008～2010	はこだて未来大学
東京国際科学フェスティバル	2009～2016?	2009～2011	国立天文台
千葉市科学フェスタ	2011～開催中	2010～2014	千葉市科学館
静岡科学技術月間	2011～開催中	2010～2014	静岡科学館
あいちサイエンスフェスティバル	2011～開催中	2011～2013	名古屋大学
フクオカ・サイエンスマンス	2000?～2015?	2010～2012	福岡県

エンスコミュニケーション「連携」活動は、広報活動でもアウトリーチ活動でもない。なぜなら、広報もアウトリーチも、コミュニケーションがなくても自組織の施策のみで成立するからである。だが、科学技術コミュニケーションサイエンスコミュニケーション「連携」活動は、2者以上の関係者のコミュニケーションがなければ成立しない。コミュニケーション回路が切断されれば、それは科学技術コミュニケーション「連携」活動の失敗である。

科学技術コミュニケーションの背景にある学問分野として、科学技術社会論や科学史があげられることがある。その科学史の考え方に、内的科学史と外的科学史という分け方がある。科学の内部でのコミュニケーション関係を記述するのが内的科学史、科学と社会とのコミュニケーション関係を記述するのが外的科学史である。その考え方を借りるならば、内的科学技術コミュニケーションと外的科学技術コミュニケーションという分け方ができるだろう。外的科学技術コミュニケーション活動をするのには、内的科学技術コミュニケーションが必要である。九大JST事業は内的科学技術コミュニケーションが継続できなかった事例であったように、遠くから見ていた筆者には思えた。

言ってみれば、科学技術コミュニケーションを推進・実践する組織・人材には科学技術コミュニケーション・リテラシーが求められるわけである。外的な科学技術リテラシー向上活動の前に、内的な科学技術コミュニケーション・リテラシーの向上が必要だ。特に、大きな組織で取り組むほど、その必要なリテラシーは高度になる。特に大

学はさらに高度なリテラシーを持っているのが、当然の前提と社会からは見られている。なぜなら、大学は高度な知の拠点であると社会からは見られているし、大学自体も自認しているからである。大学の活動が素人くさいようではいけない。

科学技術コミュニケーション活動は自組織の利益のためにやるのではない。他者の利益のためにやる活動である。それは言い換えるならば、社会に対する責任を果たすためにやるのである。そういう前提で活動を設計し実践して推進するべきであろう。組織として推進するならば、それは社会のためにやっていると強く自覚するべきだ。以上、理想論を述べたが、筆者自身の現在の科学技術コミュニケーション活動は、名大JST事業により結成された市民サークルの顧問をやっているのみである。任期切れで名大を離れて久しいが、事業を運営し、活動への参画を市民に広く呼びかけた責任を感じて引き続き顧問についている。名大が責任を持って世話をすることになっていたそのサークルと名大が距離を取ってしまったからである。予算が切れたり、人材が交代したりで、結んだ手を一方的な理由で離してしまうような科学技術コミュニケーション「連携」活動であってはならない。



Profile
藤吉 隆雄
あいちサイエンスフェスティバル
市民サークル「KagaQ」顧問
津田塾大学 総合政策研究所 特任研究員



2002年3月に九州大学大学院工学府を修了し、日本科学未来館(以下、未来館)に入社して以来、科学コミュニケーションの最前線に身を置いて活動してきました。その間、国の政策における科学コミュニケーションは、理解増進→双方向→対話→参画→共創→総合知・多層的へと変遷する中で、未来館での科学コミュニケーション活動も、来館者との対話活動や展示制作に留まらず、実証実験、シティズンサイエンス、オンライン配信イベント、学会発表や国際会議、執筆活動やメディア発信等、様々な手法によって、多様なステークホルダーを巻き込んだ活動や情報発信が展開されてきました。

そのような活動を実施する中で、今でも私の支えになっている忘れられない出来事が3つあります。

一つ目は、毛利衛宇宙飛行士(日本科学未来館初代館長)が1992年にスペースシャトルエンデバー号から微小重力の環境下での様々な理科実験を地上に配信した「ふわっと'92の『宇宙授業』」。当時私は、学校の授業中にリアルタイムで視聴し、“毛利さんのように、理科を題材に社会に大きな影響を与えられるようなことがしたい”と強く思ったことを覚えています。

二つ目は、大学の夏休みにカンボジアを縦断したバックパックの旅。当時、アンコールワットで現地の貧しい子ども達と触れ合う中で、“この国が発展するには、子ども達に広く教育を届ける必要がある”と感じたこと。

三つ目は、大学院生だった頃に自身の研究を学会発表した際、“実社会に役立つであろう研究が、この狭い学会の中だけで閉じてしまうのはもったいない”と感じたこと。こうした想いから、大学院修了後は、毛利さんのもとの、理科や科学を通して国内外の子ども達に関わる仕事がしたい、科学と社会の懸け橋になって研究を後押ししたい、という想いで未来館へ就職しました。

それから20年余りの間、先端科学技術を扱う未来館で、国内外のステークホルダーとともに科学コミュニケーション活動に携わってきましたが、英国での国際的な科学フォーラム「ESOF2016 Manchester」のデリバリーチームに参画し世界中の科学者・政策決定者等が集まる場作りをしたり、一流の科学者・研究者と対等にコミュニケーションするために社会人ドクターとして研究に励みながら(2021年 医科学博士取得)、九州大学で学んだ知識や研究姿勢、先生方や仲間との繋がり、学生時代にあちこち旅して自分の目で見聞きた実体験を支えに、今も変わらず“知の吸収”と“人との繋がり”を大切に活かしながら過ごしています。

九州大学に科学コミュニケーションの活性化を目指した科学コミュニケーション推進グループが立ち上がり、科学コミュニケーション活動が九州大学から社会全体を巻き込んで国内外に発信・展開されることは、今後ますます大きなインパクトをもたらすと思っています。今後も、アジアの玄関口として、九州大学が中核となり、科学コミュニケーション活動がより一層盛り上がるよう祈念しながら、科学コミュニケーションの分野で少しでも恩返しできるよう精進していききたいと思います。

Profile
谷村 優太
 国立研究開発法人
 科学技術振興機構(JST)
 日本科学未来館
 経営戦略室 室長代理

「科学コミュニケーションの最前線に身を置いて」



私は大学院生の頃から、中高生向けの出前授業やサイエンスカフェなどの活動に参画する形で科学コミュニケーションに携わってきました。ここ数年では、科学コミュニケーションに関する教育や研究も行っています。

なぜ私が科学コミュニケーションに携わり続けているのか。一言で言えば、科学コミュニケーションに希望を抱いているからです。社会と科学のより良い関係を構築することや科学者の社会的責任を果たすことにおいて、科学コミュニケーションは有効な手段であり、欠かすことのできない活動・概念であると思っ

この度、九州大学社会連携推進室に科学コミュニケーション推進グループ(Q-STRING)が立ち上がったことは、科学コミュニケーションに携わる一若手科学者からすると、大変嬉しいニュースでした。なぜならば、科学コミュニケーションを推進しようとする有志の科学者たちが、大学内に新組織を立ち上げた事例は珍しく、科学コミュニケーションに携わる科学者たちに勇気を与えるものだと感じたからです。

また併せて、Q-STRINGがハブとなり、九州大学内で科学コミュニケーションに希望を抱いている教職員・学生、そして、学外の多様なステークホルダーとの新たな繋がりやコラボレーションが生まれるのではないかと、という期待も抱きました。

もう一つ、私がQ-STRINGに期待している機能があります。それは大学という科学者集団において社会と科学をつなごうとする意識を醸成することです。言い換えれば、大学における科学コミュニケーションの浸透とも言えるでしょう。

科学コミュニケーションの発展には「社会」側からの賛同・協力だけでなく、「科学」側からの賛同・協力も不可欠です。しかしながら、科学コミュニケーションへの「科学」側からの賛同・協力をどのように得ていけば良いか、という議論はあまりされてきていない印象を持ちます。もちろん、科学コミュニケーションに懐疑的・批判的な科学者もいることでしょう。であるならば、科学コミュニケーション

を修正・更新する試みも必要になります。このような科学コミュニケーションのアップデート、ひいては科学コミュニケーションの浸透を、九州大学というフィールドで、当事者・実践者として模索することもQ-STRINGにチャレンジして頂きたいと思

Q-STRINGが生み出す新たな繋がりやコラボレーションが九州大学、福岡、九州、そして、全国へと広がっていくことを楽しみにしています。その広がり、九州大学のプレゼンスを向上させることに留まらず、日本における科学コミュニケーションをアップデートすることになると期待しています。

「科学コミュニケーションに携わる一若手科学者からの期待」



Profile
小林 良彦
 大分大学教育学部
 理数教育講座 講師

2020～2022年度 活動報告



社会連携推進室科学コミュニケーション推進グループ(Q-STRING)の活動

学内における科学コミュニケーション活動を更に推進・発展させるため、「科学コミュニケーション推進グループ(Q-STRING)」では、既存のアウトリーチ活動の支援や、HPでの広報支援、社会連携に係る学内の情報収集等の業務を担うこととし、学内における科学コミュニケーション活動の浸透に努めています。

【Q-STRINGメンバー】

■ 社会連携推進室・科学コミュニケーション推進グループ 現メンバー

(2024年1月時点)

役職	氏名	所属・職	就任年月日
室長	神崎 智子	理事	2023.6.1～
副室長	日下部 宜宏	副学長	2022.10.1～
〃	田上 健一	副理事	2022.10.1～
グループ長	吉岡 瑞樹	先端素粒子物理研究センター 准教授	2020.4.1～
室員	佐竹 晃佳	企画部社会共創課 課長	2022.4.1～
協力教員	三島 美佐子	総合研究博物館 教授	2020.4.1～
〃	岸村 顕広	工学研究院 応用化学部門 准教授	2020.4.1～
〃	伊藤 浩史	芸術工学研究院 未来共生デザイン部門 准教授	2020.4.1～
〃	小林 俊哉	科学技術イノベーション政策教育研究センター 准教授	2020.4.1～
〃	金 政浩	総合理工学研究院 エネルギー科学部門 准教授	2021.1.1～
〃	木下 寛子	人間環境学研究院 教育学部門 准教授	2021.1.1～
〃	房 賢貞	農学研究院 附属国際農業教育・研究推進センター 助教	2021.4.1～
〃	工藤 孔梨子	九州大学病院 国際医療部 講師	2023.4.1～
アドバイザー	三和 正人	九州先端科学技術研究所(ISIT)未来事業推進室長	2020.10.1～
〃	松本 祐典	ピノ株式会社 代表取締役	2020.10.1～
〃	小林 良彦	大分大学教育学部 講師	2020.10.1～
〃	鷗木 元香	東京大学医学系研究科 准教授	2021.1.1～ ※2023.9.1～アドバイザー
事務補佐員	長谷川 千尋	企画部社会共創課	2023.6.1～

■ OB・OG

氏名	所属・職	役職及び在任期間
内藤 敏也	理事・事務局長	2020.4.1～2020.9.30(室長)
福田 晋	理事・副学長	2020.10.1～2022.9.30(室長)
村上 洋子	理事	2020.11.16～2022.9.30(副室長)
		2022.10.1～2023.3.31(室長)
清須美 匡洋	副学長	2020.12.1～2022.3.31(副室長)
鮎澤 純子	医学研究院 基礎医学部門 准教授	2023.1.1～2023.3.31(協力教員)
三原 悦侍	総務部地域連携課 課長	2020.4.1～2021.3.31(室員)
井上 美穂	総務部地域連携課 課長	2021.4.1～2022.3.31(室員)
真藤 正人	企画部社会共創課	2021.2.16～2023.3.31(事務補佐員)

■ 活動実績

学内のみならず、学外組織とも連携し、一般の方に科学の面白さを伝えるための各種イベントを開催するほか、講師や原稿執筆を行うなど、様々な場面で活動しています。

主催・企画・運営	内容	実施時期
主催・企画・運営	サイエンスカフェ@ふくおか	～現在
	ゲイコウアート&サイエンスカフェ	2021.6、2022.8
	科学コミュニケーション推進グループ設置記念公開シンポジウム 「九州大学×科学コミュニケーション 伝える喜び伝わる喜び 双方向コミュニケーションの場を造る」	2021.9
	九州大学筑紫地区 地域連携推進チーム「ここふるサイエンスカフェ」	～現在
	九州大学創立111周年記念Vision Expo「みせる」九大の総合知プロジェクト～「海」と「食」～	2022.6～7
九州大学創立111周年記念 Vision Expo シンポジウム「九州大学×社会共創『社会と大学をつなぐ挑戦』～みんなでつくる総合知～」	2023.3	

原稿・論文執筆等	内容	実施時期
原稿・論文執筆等	「科学コミュニケーションを通じた地域社会と科学の関わり -『双方向コミュニケーション』『共創』の実装に向けて」	学術の動向25巻8号p.8-21-8-27、岸村、2020
	「サイエンスカフェ@ふくおか」の実践と分析	JASC協会誌「サイエンスコミュニケーション」第16号 Vol.10 No.2 p.62-67、吉岡・三島・小林、2020
	「九州北部地域における草の根サイエンスカフェの広がり」	JASC協会誌「サイエンスコミュニケーション」第16号 Vol.10 No.2 p.74-79、小林・吉岡・三島、2020
	「SDGsを支える科学者・研究者コミュニティになるために」	バイオマテリアル：生体材料 39巻3号 p.158-163、岸村、2021
	「福岡県におけるサイエンスカフェの実践記録分析：サイエンスカフェの継続性に注目して」	科学技術コミュニケーション Vol.30 p.31-43、三島・小林・吉岡、2022

講師登壇	内容	実施時期
講師登壇	アーバンデザイン会議九大 第3回まちづくりスクール	吉岡、2020.12
	宇宙線探究活動“探Q” - 宇宙線で探る宇宙の神秘	吉岡、2020.12
	福岡市科学館「ジュニア科学者養成講座 ニュートンコース」	吉岡、岸村、金、2021.11～2022.3
	第14回オンラインランチおしゃべり会 Lunchtime Online Chit-Chat Café 社会連携推進室科学コミュニケーション推進グループの紹介	吉岡、2021.10
	公開シンポジウム「図書館と社会融合 社会に開かれた情報資源」 「研究活動の担い手拡大に向けたシチズンサイエンスの活用と図書館への期待」	岸村、2021.12
	第16回オンラインランチおしゃべり会 Lunchtime Online Chit-Chat Café 「若手が行うアカデミー活動」	岸村、2021.12
	第3回 九州・山口地区高大連携会議 社会連携推進室科学コミュニケーション推進グループの紹介	吉岡、2021.12
	Brown Bag Seminar No.46 「若手科学者がリードする『アカデミー活動』～科学者として生きる、とは何かを考えながら～」	岸村、2022.4
	第10回サイエンスカフェ@唐津「シン・素粒子で探る宇宙の謎」	吉岡、2022.7
	Brown Bag Seminar No.86「ビッグサイエンスを通じて見えた社会共創の重要性」	吉岡、2023.3

協力	内容	実施時期
協力	元岡オープンサロン「九州大学Sciencecafe - 車が空を飛ぶ時代? -」	2020.10
	第6回サイエンスカフェ@唐津「燃やさないエネルギー社会」	2021.4
	第7回サイエンスカフェ@唐津「中高生のための思い込みからの脱却セミナー - 心理学ブートキャンプ -」	2021.8
	第8回サイエンスカフェ@唐津「社会における科学の役割」	2022.3
	第9回サイエンスカフェ@唐津「唐津の海から海洋ゴミ問題を一緒に考えてみよう」	2022.5
	Global Young Academy総会兼学会・市民講座 「創造する未来と科学の可能性 - さまざまな科学のつなぎ方を創造しよう -」	2022.6

その他	内容	実施時期
その他	「九州大学 科学コミュニケーションに関する教員意識調査」	2021.8
	将来の夢を切り拓く“高大連携”「世界に羽ばたく高校生の成果発表会」審査員	吉岡、2021.12
	福岡市科学館「アインシュタイン展」展示パネル 監修	金・吉岡、2022.3
	福岡市科学館季刊誌 SCIENCE&CREATIVE「日常の中の相対性理論」記事監修	金・吉岡、2022.4

【イベント】

サイエンスカフェ@ふくおか

「サイエンスカフェ@ふくおか」は、Q-STRINGグループ長である吉岡瑞樹准教授が中心となり、子どもから大人まで誰でも気軽に参加でき、講師との対話を楽しむことができるイベントとして2012年8月から現在まで開催しています。福岡市中心部にある「BIZCOLI交流ラウンジ」をメイン会場とし、これまで数多くの参加者ととも様々な「サイエンス」について考えてきました。

■ 2020～2022年度「サイエンスカフェ@ふくおか」 登壇一覧

開催回/日	氏名	所属
第75回 2020/7/10	山田 鉄兵	東京大学大学院理学系研究科
	タイトル:	熱を電気に変換する分子ロボットの謎に迫る!～熱応答性分子科学を導入した熱化学電池の開発～
第76回 2020/9/25	町田 真美	国立天文台科学研究所
	タイトル:	ブラックホールの謎に迫る!～見えるの?見えないの?～
第77回 2020/12/11	綿木 元香	九州大学 生体防御医学研究所(現)東京大学
	タイトル:	ふたごの個性の謎に迫る!遺伝子にはスイッチがついている?
第78回 2021/3/5	内田 智士	京都府立医科大学
	タイトル:	万能薬にもなるメッセンジャーRNAの謎に迫る!～コロナウイルスに対する救世主～
第79回 2021/5/28	木下 寛子	九州大学人間環境学研究院 教育学部門
	タイトル:	霧困気の謎に迫る!～姿を現さないものの環境心理学～
第80回 2021/8/6	竹村 俊彦	九州大学応用力学研究所
	タイトル:	PM2.5の謎に迫る!～気候変動と大気汚染の深い関係～
第81回 2021/11/5	藤田 龍介	九州大学農学研究院 資源生物科学部門
	タイトル:	新たなウイルスの謎に迫る!～ウイルスハンター、虫を追う～
第82回 2022/1/14	松島 敏則	九州大学カーボンニュートラルエネルギー国際研究所
	タイトル:	太陽光電池の謎に迫る!～脱炭素技術の最前線～
第83回 2022/3/4	小島 立	九州大学法学研究院 国際関係法学部門
	タイトル:	「空飛ぶクルマ」と未来社会!～福岡・九州における可能性と課題～
第84回 2022/3/25	三浦 岳	九州大学医学研究院 基礎医学部門
	タイトル:	骨の形の謎に迫る!～数学がつかぬ異分野融合研究～
第85回 2022/5/13	山本 順司	九州大学理学研究院 地球惑星科学部門
	タイトル:	環境の謎に迫る!～持続不可能な地球～
第86回 2022/6/21	太田 耕平	九州大学農学研究院 資源生物科学部門
	タイトル:	未来の魚の謎に迫る!～新しい養殖のテクノロジー～
第87回 2022/7/5	小島 夫美子	九州大学医学研究院 保健学部門
	タイトル:	海に潜む寄生虫の謎に迫る!～魚とヒトとアニサキス～
第88回 2022/7/22	城 一裕	九州大学芸術工学研究院 音響設計部門
	タイトル:	バイオ・フードラボから考える「海」と「食」
第89回 2022/10/7	河野 俊行	九州大学法学研究院 国際関係法学部門
	タイトル:	世界遺産、どこまで知っていますか?～「水」を通して見る世界文化遺産の価値～
第90回 2022/12/2	中村 潤児	九州大学カーボンニュートラルエネルギー国際研究所
	タイトル:	メタノールエネルギーキャリアの謎に迫る!～2050年カーボンニュートラルは達成できるのか!?～
第91回 2022/12/13	長津 結一郎	九州大学芸術工学研究院 未来共生デザイン部門
	タイトル:	アート×農の魅力に迫る!～農村社会にアピールする芸術活動～

上記の表からもわかるように、「サイエンスカフェ@ふくおか」はバラエティ豊かなテーマを取り扱っており、九州大学の教員以外にも他機関に所属する研究者を講師としてお迎えする回もあります。2021年5月28日には、Q-STRINGから木下寛子准教授(人間環境学研究院)が登壇し、木下准教授が専門とする「環境心理学」とは何か、霧困気とは一体何なのか、講演を通して、霧困気の謎について参加者ととも考えました。

REPORT

第79回サイエンスカフェ@ふくおかのテーマは、「霧困気の謎に迫る!」～姿を現さないものの環境心理学～

心理学とは社会心理学や教育心理学のように、規模は違って人間を対象としていますが、今回取り扱う環境心理学は、人間の生きている環境の方を考えてみようという分野だそうです。今回はそんな、心理学分野のチャレンジ領域である環境心理学について、詳しく教えていただきました。今回もウイルス感染症拡大防止のため、BIZCOLIさんのZoomを用いての開催となりました。



今回の講師は九州大学人間環境学研究院の木下寛子准教授です。学生の頃に始めたフィールドワークの経験から、霧困気をテーマにする研究に取り組み始め、「出会いと霧困気の解釈学:小学校のフィールドから」という本も執筆されています。学生の頃に始めた小学校でのフィールドワークを未だに続けており、その時の体験談や、小学校フィールドワークに行かれた際のスケッチを交えながらお話をさせていただきました。

【今までの心理学と霧困気】

選択肢の中から、一つ選ぶための判断材料であり、そこで選ばれる一つについて、よりよいものにするための指標を作っていくというのがこれまでの心理学がやってきたことでした。霧困気を扱う際には霧困気そのものではなく、霧困気を構成する尺度・指標を新たに定義して、それを評価するという間接的な扱いでした。

【環境心理学と霧困気】

人を取り巻く環境を考え、環境が人にどのように影響を与えるか、その中で人をどのように理解できるようにするか霧困気そのものとはいったい何なのか、どう理解すればよいか考えます。

【霧困気とは】

部屋をおしゃれにしようとしたとき、明るさや内装、家具のレイアウトなどを考えますが、それは詰まる所、「霧困気」を気にしていると言えます。またおしゃれなカフェを探すために、自分の期待するイメージ(霧困気)に近いものを、他人の評価や写真などをみて、探すということを多くの人がされているのではないのでしょうか。

イベント終了後には、九州大学社会連携推進室のホームページに各回の様子や要点をまとめたレポートを掲載し、より多くの人にサイエンスカフェの情報を届けることができるよう努めています。

また、「サイエンスカフェ@ふくおか」は2023年度に記念すべき第100回目を迎える予定です。これまで培ってきた「サイエンスカフェ@ふくおか」での経験・ノウハウは、本学における科学コミュニケーション活動等の支援を幅広く展開していくうえで、非常に重要なものの一つであると言えます。「サイエンスカフェ@ふくおか」をはじめとした本学の科学コミュニケーション活動が更に発展し、より多くの人々が科学の面白さや奥深さに触れ、さまざまな科学に親しむことのできる場が拡大されていくことを願っています。

これまでの開催レポートはこちら https://syarenkei.kyushu-u.ac.jp/events/science_cafe/

シンポジウム

SYMPOSIUM 1



科学コミュニケーション推進グループ設置記念 公開シンポジウム



九州大学×科学コミュニケーション

『伝える喜び、伝わる喜び ~双方向コミュニケーションの場を造る~』

学内外で行われる科学コミュニケーション活動の支援を目的に、九州大学社会連携推進室に「科学コミュニケーション推進グループ(Q-STRING)」が新設されたことに伴い、2021年9月7日に、当該グループの設置記念公開シンポジウムをオンラインで開催しました。

シンポジウムでは、福田晋理事・副学長(開催当時の社会連携推進室長)の開会の挨拶に始まり、本学の卒業生でジャーナリストの元村有希子氏(毎日新聞論説副委員長)と本学科学技術イノベーション政策教育研究センターの小林俊哉准教授による基調講演が行われました。続いて、同グループの吉岡瑞樹准教授のほか、学内外でアウトリーチ活動を積極的に行う方々から、2012年から現在まで継続している「サイエンスカフェ@ふくおか」をはじめとした学内外の科学コミュニケーション活動の事例発表や、各活動におけるこれまでの実績と、それぞれが抱える課題について情報提供が行われました。その後、講演者によるパネルディスカッションを

通じて、科学コミュニケーションの重要性や今後の展望について、積極的な意見交換が行われました。

最後に、荒殿理事・副学長・プロボストによる挨拶で、約3時間にわたり大いににぎわったシンポジウムは幕を閉じました。

シンポジウムの参加者は学内外で約250名にのぼり、閉会後に開催されたオンラインでの交流会にも多数が参加するなど、講演者・参加者の区別なく、活発な議論が行われました。

閉会後に実施された事後アンケートでは、「これまでなんとなく見たり感じていたりしたことも、『科学』という軸を持つことによって、より深く、興味深く知ることができると思います」「研究者・職員・学生と一般市民とが科学に関してお互いにコミュニケーションを取り合う場所としてこのような活動が今後も継続されることを心から期待します」といった意見が寄せられるなど、科学コミュニケーションに対する期待や大学としての使命を再認識するイベントとなりました。



基調講演

Lectures

1



「鳥の目 虫の目 科学の目」

元村 有希子(毎日新聞 論説副委員長)

本学教育学部卒業生で、毎日新聞の論説副委員長を務める科学ジャーナリストである元村有希子氏から、科学の視点や専門知識を政策へ反映するための「科学コミュニケーション」の重要性や、科学者、メディア、政治家等が協力した持続可能な科学コミュニケーションを実現する仕組み作りの必要性、メディアとしての公平な情報提供と根拠ある主張の重要性について講演いただきました。

Lectures

「What is 科学コミュニケーション
How to 科学コミュニケーション」

小林 俊哉
(九州大学科学技術イノベーション
政策教育研究センター 准教授)

小林准教授は、講演の中で「科学コミュニケーションは、科学者からの一方的な情報提供だけでなく、市民からの問いかけやコメント等、双方向のコミュニケーションが必要である」と主張しました。しかし、科学コミュニケーション活動に研究者が積極的に参加するためのモチベーションがまだ低いという問題があるため、その支援策を明らかにするために調査を行っている」と述べました。



事例紹介

Lectures

3

北海道大学 CoSTEP

小林 良彦
(九州大学社会連携推進室
科学コミュニケーション推進グループ アドバイザー)

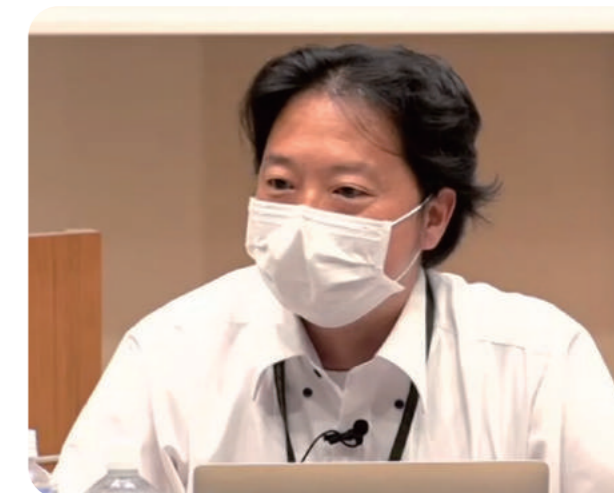
北海道大学の小林特任助教(現・大分大学教育学部講師)から、同大学のCoSTEPコースについて紹介いただきました。CoSTEPは科学技術コミュニケーションの教育と研究プログラムで、科学技術コミュニケーション人材の養成、多様な科学技術コミュニケーションの実践、人材育成手法の研究開発という使命のもと、科学と社会の双方向的な関係を促進し、より良い関係を築くための活動内容について、複数の事例を紹介いただきました。

Lectures

サイエンスカフェ@ふくおか

吉岡 瑞樹
(九州大学先端素粒子物理研究センター 准教授)

吉岡准教授は、2012年から九州経済調査協会が運営する会員制図書館のBIZCOLIを会場として、「サイエンスカフェ@ふくおか」を開催しています。このイベントは、吉岡准教授の専門である素粒子物理学の将来計画の周知を目的にスタートしましたが、現在は素粒子物理に留まらず、幅広いテーマを取り上げ、九大教員や他大学の教員が講師を務めています。研究者と参加者の双方向のコミュニケーションを促進できるよう工夫がされており、参加者からも好評を博していますが、イベントの継続性を担保するためには、講師の選定や運営面における大学の支援が必要不可欠であると述べました。



Lectures

いきものサロン

津守 不二夫
(九州大学工学研究院 教授)

大学キャンパス内の自然環境を活かし、エンジニアの視点から生き物の研究や観察を通じて異分野交流の活性化を図ることを目的として2016年から始まった「いきものサロン」。年3〜4回程度キャンパス内で開催されており、講師や参加者同士のコミュニケーションが活発に行われています。

津守教授は、自身が楽しんで取り組んでいることが、サロンの運営を続ける動機となっていると述べ、今後もより多くの人々と生き物について学び、交流する機会を提供していきたいと述べました。



Lectures

ゲイコウアート&サイエンスカフェ

伊藤 浩史
(九州大学芸術工学研究院 准教授)

大橋キャンパスにある芸術工学研究院では、芸術と工学を結びつけた異なる分野の研究者が集まっており、市民向けの施設公開イベントを毎年1回開催しています。その中で、伊藤准教授は「ゲイコウアート&サイエンスカフェ」を運営し、サイエンスカフェを通じて科学とアートの融合を紹介し、大橋キャンパスの近隣住民や研究者同士の新たなつながりを生み出しています。

さらに、大橋キャンパスでは、2017年から芸術工学部の学生や教員が自身の研究や活動を紹介する「サイエンスプランター」というイベントを芸術工学部図書館で開催しており、学術交流や情報共有の場として機能しています。また、図書館を会場として利用することで、図書館のPRや資料の活用促進にも繋がっています。



筑紫地区地域連携推進チーム

金 政浩(九州大学総合理工学研究院 准教授)



筑紫キャンパスでは、研究者と地域との連携活動内容の周知や、地域住民との連携の窓口を明確化することを目的として「筑紫地区地域連携推進チーム」が発足し、教職員が協力して活動を行っています。

大野城市の「心のふるさと館」でのサイエンスカフェの開催を計画するなど、まだ発足したばかりのチームでありながらも、地域との連携を強化し、科学コミュニケーション活動を拡大させるため積極的に活動しています。

Lectures

九大生の教える科学教室 from iTOP

石田 匠(九州大学工学部機械航空工学科)

iTOP(アイトッパ)は、「学生と地域を繋ぐ街づくり」をモットーに糸島で活動する九州大学の公認サークルで、科学教室のほかにも、カフェやコミュニティラジオの運営なども行っています。iTOPの科学教室部門では、2011年から小学校や公民館で科学教室やサイエンスショーを開催しており、地域と大学の知を結びつける活動を行っています。

九大の研究者・学生と地域の人々の橋渡しができる存在として活躍すべく、今後も様々な活動に取り組む意欲を熱く語りました。



Lectures

Quricon

上土井 宏太(九州大学附属図書館 学術サポート課 学習・研究支援係)



Quricon(クリコン)は、理学部生物学科の大学院生をはじめとする有志により、理学部内の学科間の交流を図ることを目的として2011年から開始された学際交流イベントです。2020年4月からは様々な部局の学生から構成されている図書館のTAが実行委員に加わり、テーマや登壇者の選定を行うなど、学生主体の運営がなされています。

今後も、学際交流の推進を目標に、進化し続けるイベントとして学内のコミュニティに貢献していきたいと語りました。

SYMPOSIUM 2

VISION EXPO シンポジウム



九州大学 × 社会共創

『社会と大学をつなぐ挑戦』～みんなでつくる総合知～

2023年3月6日に、伊都キャンパスにある稲盛財団記念館とオンラインのハイブリッド形式でシンポジウムを開催しました。

本学は、2030年に目指す姿を「総合知で社会変革を牽引する大学」と定め、「知の拠点として地域社会やグローバル社会と共生・共創し、研究教育活動を通して社会の持続可能な発展と人々のウェルビーイングの向上に貢献する」という社会共創のビジョンを掲げています。本シンポジウムは、その社会共創のビジョンの下、社会と大学をいかに結びつけ総合知を創出・活用するか、学内外から招いた多様な登壇者による講演を通じて、共創の場づくりと実践について考えることを目的とし、本学創立111周年を記念したVISION EXPO

の一環としても位置付けられました。

シンポジウムでは、石橋達朗総長の開会挨拶に始まり、福岡市の中村英一副市長から福岡市と本学による共創の取り組みについて紹介いただきました。

社会連携推進室室長の村上洋子理事による開催趣旨の説明に続き、同室科学コミュニケーション推進グループのグループ長を務める先端素粒子物理研究センターの吉岡瑞樹准教授が本学における科学コミュニケーションの現状を学内アンケートの結果を交えながら説明したうえで、VISION 2030に掲げる社会共創の実現に向けては、「各方面の支援はもとより、大学全体として科学コミュニケーション活動に対する意識改革の必要性がある」と熱く語りました。

—◇—◇—◇—◇—

第一部では、「共創の場としての大学」をテーマに、本学未来社会デザイン統括本部の亀井信一ディレクターをはじめ、各大学で社会共創に関する取り組みを続けている講演者からの発表が行われました。亀井ディレクターは、「未来共創を巡る3つの誤解」と題し、社会共創の視点から問題提起を行い、未来の創造や社会共創は個別の領域を結ぶ共領域の形成が必要であると述べ、2022年度に新設された未来社会デザイン統括本部の役割と今後の展望について語りました。続いての講演では、大阪大学21世紀懐徳堂の肥後特任研究員から、同堂が15年間で培った成果として、教育研究の関心者増加、企業や自治体との共創、研究者支援の体制作りの事例を紹介したほか、学内他組織との連携強化、大学ブランドへのアウトリーチでの貢献、アウトリーチ活動の成果の見える化といった課題を抱えている現状を語り、共創活動が生きがいを育む社会にどう貢献するかの検討や、活動の評価方法確立など、今後の取り組み方針が示されました。福岡大学商学部シチズンサイエンス研究センターのセン

ター長を務める森田泰暢准教授からは、太宰府市をフィールドとした市民協働型での研究や取り組みについての事例紹介があり、研究者と市民が一緒になって研究を行うシチズンサイエンスを推進していくことは、「新しい公共」に繋がっていくのではないかと期待が語られました。第一部の最後には、九州大学経済学研究院の藤井秀道教授が、自身が参画している文系4部局から成る「人社系協働研究・教育 commons」での活動経験等をもとに、社会課題解決に向けた総合知の重要性を述べ、大学が持つポテンシャルは大きいものの、「社会共創」への活用は十分ではないと指摘しました。また、アウトリーチ活動や社会連携活動があまり積極的に行うことができていない研究者が多い現状に対して、社会共創に資する取り組みの評価体制の構築や、諸活動に対する支援の必要性について言及しました。

—◇—◇—◇—◇—

第二部では、「実践から学ぶ共創」をテーマに、広く社会で「社会共創」のための活動を行う方々による招待講演を行い

ました。「市民参画とインパクトの視点からシチズンサイエンスを考える」というテーマで日本科学未来館の谷村優太氏に講演いただき、日本科学未来館での事例を紹介いただきました。講演の中で、谷村氏はシチズンサイエンスの企画時には、社会や人々を巻き込む「インパクト」、参加者にとっての「ワクワク感」、「研究開発の寄与」の三つのポイントを考えるべきであると述べました。NHKディレクターの磯田美菜氏からは、社会と科学の架け橋として公共メディアができることとしてNHKが実践するシチズンサイエンスの取り組みである「シチズンラボ」の事例をもとに、公共メディアが作る共創の場づくりについて講演いただきました。続いて、国立科学博物館認定のサイエンスコミュニケーターでもあり、大学でサイエンスコミュニケーションをはじめとする研究も行いながら、芸人として活動している黒ラブ教授に講演いただき、無関心層に対してどのように科学的なことを魅力的に伝え、理解してもらいやすいようにするか、具体例を用いて紹介いただきました。講演の中で、黒ラブ教授は「サイエンスコミュニケーションは、科学的内容を伝えようとする相手の立場を理解することが必要である一方で、科学の魅力をいかに伝えるかという点が重要である」と述べました。第二部の最後は、フリーのサイエンスコミュニケーターとして活動する本田隆行氏から、社会共創の中で大事な要素について、「社会」とは何を指しているのかという視点から講演いただきました。“社会”は家族単位から、

近所、地域、自治体、国といった規模によって変わり、それぞれ求めるものは異なっています。科学コミュニケーションでは、どの“社会”に対して、どのように科学をつなげるかが重要であり、そのためには多様な手法と柔軟な思考が必要です。そういった科学コミュニケーションを行う上での一つの手段として大学があるが、その「場」を提供するだけでなく、その場を活かすアイデアを持ち、様々な場面でつなげる「人」の存在が重要であり、「場」を生かすためにも、「人」にも光を当てる必要があると述べ、第二部の講演は幕を閉じました。



第一部・第二部の講演を受け、会場・オンラインの参加者から質問を募り、全体討論を行いました。「九州大学が考える“社会”とは何か?」といった質問や、「市民と協働して科学に取り組むには何が必要か」という質問が投げかけられるなど、参加した全員で社会共創とは何かを考える場となりました。最後は、本学荒殿理事・副学長・プロボストからの閉会挨拶によって、シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じました。

閉会後のアンケートでは、「まだまだ科学が身近でないと思う」といった意見や、「組織内で同じ目的を持つ部署が連携するにはどうすればよいか」といった質問、「共創について大学からの発信は非常に参考になった」との感想等が寄せられました。

